

第5章 今後の課題

5-1 今後のモニタリングについて

詳細調査では、今年度までに317箇所 79エリアに区分して解析してきた。今年度は、平成22年度（宗谷森林管理署）、平成24年度（胆振東部森林管理署）の一部の追跡モニタリングと、新規箇所の調査を行った。今後も設定した調査区のモニタリングを行いながら、エゾシカによる森林への影響の把握と対策を検討することになる。

今後のモニタリングには以下の検討が必要である。

1) 次年度以降の追跡調査の実施箇所

追跡調査は、5年ごとの調査間隔を基本としているが、昨年度は、根釧西部森林管理署の調査が行なうことが出来なかった。

追跡調査をする上で考慮すべきことは、前回調査から5年以上経過していること（ちょうど5年が最も望ましい）と地域的にひとまとまりであることが調査の計画を立てやすいため望ましい。追跡調査の解析のしやすさを考慮すると、5年ごとに調査したデータを比較するほうが良いが、様々な事情により5年ごとに調査できない可能性がある。そのため、5年ごとに調査ができない場合は、調査結果を換算するようなことを考慮に入れる必要がある。

次年度調査のモニタリング対象となる調査地は、網走中部森林管理署、留萌南部森林管理署、十勝東部森林管理署、石狩森林管理署である。十勝東部森林管理署は、エゾシカの高利用地であり、調査の優先度は高いと考えられる。また、網走中部森林管理署もエゾシカの利用度も中程度であることから優先度は高いと考えられる。さらに調査実施後から5年経過したものの追跡調査されていない根釧西部森林管理署が十勝東部森林管理署と網走中部森林管理署と隣あうことから、この3署をまとめて調査することが考えられる。また、追跡調査対象でありながら調査の優先度が下がってしまっている空知森林管理署、石狩森林管理署、留萌南部森林管理署等に関しては、必要に応じて調査を検討する必要がある。

表 5-1-1 各年度の調査実施状況

調査年	地点数	森林管理署(支署)		
		高利用地	中利用地	低利用地
2009 H21	60	日高南北 釧路・根釧西	上川中	
2010 H22	60	宗谷	空知	檜山
2011 H23	75	十勝東	留萌南 網走中	石狩
2012 H24	60	十勝西	胆振東 上川南	後志
2013 H25	30	網走南	根釧東	
2014 H26	45	日高南 東大雪山	上川中	
2015 H27	30	宗谷・胆振東	留萌北 網走西 西紋別	

※太字は、追跡調査

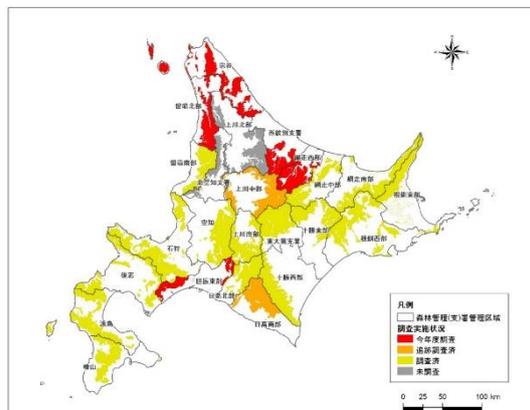


図 5-1-1 調査実施署の分布

2) 未実施地域での調査について

今年度は、簡易調査、SPUE などではエゾシカの影響が予測されるエリアとして、留萌北部森林管理署、網走西部森林管理署、網走西部森林管理署西紋別支署で新規に調査が行われた。詳細調査が未実施の署は、上川北部森林管理署と空知森林管理署北空知支署の2署であり、全道的なエゾシカ被害の把握として、これらの署についても新規に調査プロットを設置することが考えられる。

5-2 エゾシカ対策への活用に向けたデータの解析について

これまでの調査で、ほぼ全道における天然林に対する影響に関する詳細なデータが蓄積され、影響の評価及び予測もなされてきた。また、昨年度から追跡調査も行なわれ、影響の経年変化も把握する体制が確立されている。今後は、蓄積されたデータを用いてエゾシカ対策に資するための解析を様々な角度から行なう必要がある。

1) 全年度分の調査データを用いた解析

本年度の解析(2-4-5、2-50 ページ参照)により、植生に対するシカによる食害が、地形や周辺環境にも影響を受け、またシカに食害を受けやすい樹種が科学的に抽出できる可能性が示唆された。そのため、過年度までの本事業の調査データをまとめて解析し、全道及び各地域のエゾシカによる食害が周辺環境等の影響で発生する要因や選好樹種の傾向を見るための解析を行なうことで、より深い評価につながると考えられる。解析モデルには、積雪深や周辺環境(調査地周辺 1km 程度)のデータを組み込むことが考えられる。

2) 森林生態系多様性基礎調査のデータの援用

本事業と平行して実施されている森林生態系多様性基礎調査は、現在、第4期調査（平成26年開始）の2年目にあたる。そのため、第3期調査（平成21年～平成25年）までのデータが揃っている。第3期調査から単木毎の動物による食害の記録をとっており、現在、解析が進められているため、本事業と共通に解析できる部分は共有することを検討する。

5-3 簡易チェックシートについて

簡易チェックシートについて、評価項目に関しては調査項目を固定することで年度間の比較を行なうことができるため、森林の評価に関する項目の変更の必要はない。しかしながら、集計作業とその後の分析作業を効率的に行うことができる項目を追加することを検討する。

今後は、調査者のモチベーションアップによって調査点数の増加や入力ミス等を減らすことが課題となる。そのため、以下のような取り組みを検討する。

1) 簡便な方法による調査結果の周知

現在、各署に本事業の報告書を配布しているが、もっと簡易的な方法で簡易調査の結果を周知していただく必要がある。そのために、図3-4-4（3-22ページ参照）のような結果図等をチェックシートとともに調査者に配布し、現況を把握していただくことを検討する。

2) 簡易チェックシートデータ入力時に影響評価点の算出

現場で記入された簡易チェックシートは、各事務所でエクセルデータに入力される。このときに、天然林に関するデータは、明石（2015）の基準（3-23ページ参照）で評価点が計算できるため、即座に現場のエゾシカの影響を評価できるうえ、点数計算のための正確なデータの入力が促され、項目の入力ミスを減少させることが期待できる。